

第2弾 芦川写真集 芦川から第3回 作品説明文

芦川村はかつて林業の盛んな集落でした。面積の7~8割程度が山林なので、これまでに住民人口は現在の約6倍に当たる二千人を超えた時期もありました。村民に加えて樵を始めとした大勢の働き手が外から入って来て、村は活気づいていたのです。この頃が芦川村歴史上最大の人口で、当時は恵比寿屋（えびすや）と言う旅館もあり、働き手の利用する宿として繁盛していました。

時は1960年代前半、日本は高度経済成長期の真っただ中、労働力を求める企業に吸い取られるように、男女を問わず若者は村外へと働きに出ることとなりました。労働力を失った村の産業である林業は徐々に衰退していきました。当然の結果、炭焼きも活気を失ってしまい、沢山あった窯は瞬く間にその数を減らしていきました。

現在の山林は管理の手が届かず、荒れた山となり、緑こそ呈しているものの、山としての息づかいは弱まってしまいました。茅葺屋根の材料である茅を育てていた山も今では雑木に覆われてしまい、陽は差し込まず茅は消滅したのです。

これから先、住民はどうかして山を再生できるのか、それとも荒れた山が増え続けるのか、芦川集落にはこんな難題がのしかかっているのです。

写真家 高橋ぎいち



- 1 敷地の入り口に積み上げられた薪、囲炉裏で燃やしたり風呂釜の燃料にしたり、現在の文化生活の中でもまだまだ活躍の場がありますが、木を切ったり割ったりして燃料を確保するのは、お年寄りにとって大変な労働なのです。



2 以前、土間の竈で煮炊きをしていた台所燃料は、多くの家庭でプロパンガスに変わりました。高齢独居家庭では安全のため現状のガスコンロからさらに電気コンロに変える家庭も出始めています。



- 3 背後に写る雪を被った山並みは、日本の自然景観の中でも有名な南アルプスです。手前右に建つのは炭焼き小屋です。今ではすっかり少なくなっ
てしまいましたが、自家用として細々と存続する姿を見せてくれています。
芦川村を象徴する山の景観の一つです。



- 4 山裾の草地に生えた踏の臺です。この集落では他にも茸、薇、蕨など色々な山菜が採れます。ここは海拔 700m の集落なので、植物が芽を出すのは平地よりも一月近く遅い 3 月頃となります。



- 5 第1弾土門拳文化賞受賞作品第2回で紹介しました一家3人の人物で、中央に座位していたおばあちゃんです。前回説明をしたとおり、おばあちゃんだけを撮ったもので、数年後遺影として使われることになったのは、この写真です。



6 集落の生活道路で左に曲がった下り道です。土地柄水平で直線の道は少ない環境です。画面手前に写し込んだ生垣ですが、山林の多い地域であるのに、わざわざ生垣を造り大切に手入れをする姿勢に、木を愛する自然と共生する住民の気持ちを感じます。



- 7 集会所の外壁に2008年度の上芦川^{かみあしがわ}集落の役員名がこのような形で周知されています。痕跡からここには色々なお知らせの文書が貼られていたことが分かります。以前からずっと続いてきた情報発信の形態が今も引き継がれているのです。



8 撮影時期は3月と記憶しています。寒い芦川村にも暖かい日が多くなり、植物は芽を出し木々は花を咲かせ、地面が茶色から緑色へと変わってきます。現在は梅の花が咲きだしていますが、4月になると次には桜の花を愛でることができます。



9 とても大きな葉の蔭が道端に群生しているのを見つけました。近くに住んでいる人に、葉が大きく背も高い珍しい蔭ですね。と尋ねたが、「いやー、ここでは珍しいことはない。」との答えでした。しかし、これまでに芦川でこの手の物に出合ったことはありません。私にとって芦川での不思議なことの一つです。



10 旧道の分かれ道の角に立っている石灯籠、昔の家は屋根が茅で出来ていてとても燃えやすいものでした。従って怖いことの一つに火事があげられます。これは火の神様、住民はここを通る都度手を合わせては、息災延命を願うのです。